

ドイツ大統領が来館

10月27日、ドイツ連邦共和国のヴルフ大統領が徳島県鳴門市を訪問されました。最初に鳴門市ドイツ館を訪問、飯泉徳島県知事と泉鳴門市長による出迎えを受けました。しかし大統領と随員が一番喜んだのは、どうやら歓迎の列の中で小学校と保育園の子供たちが待ち受けていたことのようにです。とりわけ保育園児たちがベートーヴェン「第九」の歌をドイツ語で歌っていたのが驚きだったようで、歓迎レセプションの中でそのことに触れ、再度子供たちとふれあい、記念撮影をしようと提案して、当初の予定がずれてしまうほどでした。おかげで、ドイツ館内での案内はまったくの駆け足になってしまったのですが、小さな保育園児たちが「第九」の歌声で大統領を迎え、それが大統領一行を喜ばせたのは、前国際交流員アンヤ・ハンケルとそのお子さんたちの保育園での日独交流のまいた種が開花したものであることを考えると、それも仕方ないかと思っています。



保育園児に話しかけるヴルフ大統領

今回の来訪で、ヴルフ氏自身としては鳴門に来られるのは3度目です。2005年、2009年にはニーダーザクセン州の首相として来ました。ニーダーザクセン州は、鳴門市の姉妹都市であるリュネブルク市が位置する州であり、その縁でドイツ館にはニーダーザクセン州観光展示コーナーが設けられています。この2回の訪問を通して、四国の片隅の板東でドイツ兵捕虜が収容所にいたこと、その地で彼らの自主的な活動が許され、地

域住民との交流があったこと、第二次世界大戦後草に覆われていたドイツ兵捕虜の残した慰霊碑のいわば墓守として世話し続けたひとりの女性の活動をきっかけとして新たな日独交流が始まったこと、さらにはベ



歓迎セレモニーでのスピーチ

ートヴェンの交響曲第九番の初演が板東であったのを記念して鳴門市で毎年6月に「第九」の演奏会が開催されていることなどをご存知です。今年6月、皇太子殿下訪独の際の歓迎晩餐会で、大統領が歓迎スピーチの中で板東のことに言及しているほどです。

そのためもあって、今回日独交流150周年記念行事のために来日した折に、その訪問先のひとつに鳴門市ドイツ館が選ばれたのだと思います。私たちにとって、大統領の訪問は非常に名誉なことであり、またとても喜ばしいことでありました。これからも、ドイツ館は日独交流のために与えられた役割を十二分に果たして行きたいと存じます。



慰霊碑に献花をする手前から鳴門市長、大統領、徳島県知事

ドイツ館訪問の後、大統領は板東俘虜収容所跡地にある慰霊碑に向かい、そこで徳島県知事、鳴門市長と共に献花をされました。

国際交流員が交代

この7月末に国際交流員アンヤ・ハンケルが帰国し、替わってロバート・テルシグが鳴門市ドイツ館に着任しました。前任のアンヤはドイツ館に来た国際交流員のなかで初めての女性であり、しかもご家族（ご主人とお子様2人）といっしょというのも最初のことでした。そこでドイツ館での仕事以外に家族ぐるみの地域との交流など、これまで以上の多彩な国際交流が見られたことは嬉しい限りでした。

鳴門の4人の国際交流員、離任 (Anja Hankel)

私は2009年8月から2011年7月まで鳴門市ドイツ館に国際交流員として勤めていました。鳴門市とリュネブルク市の姉妹都市交流を深めることが少し支援できて嬉しく思いました。感動することがたくさんあった二年間は、楽しくてとても面白かったです。2009年8月に前の国際交流員ワグナーさんの後任として夫と1歳と4歳だった子供二人と一緒に鳴門で生活を始めた時、働くママとして日常生活をこなすのは私にとって大変でしたが、やさしい心を持つ夫、同僚、保育所の先生、近所の人と友人、つまり周りの人の支援によってスムーズな生活をスタートすることができて嬉しかったです。

私の仕事内容は、姉妹都市との連絡や翻訳、通訳、週一回のドイツ語講座や、ドイツに関するイベントや展示会などを企画することなどでした。2010年10月にリュネブルク使節団が鳴門に滞在した時には、心温まる市民の交流が実現されていることを知りました。また、使節団が滞在する間の日程を企画・準備することや使節団員に同行するのはとても大変なことだと



執務中のアンヤ・ハンケル

分かりました。

さらに私は、来館された外国のお客様に楽しみながらドイツ館を案内していました。約100年前に板東で生まれた日独友好の歴史がこんなにも詳しく分かりやすく展示されていることは素晴らしいと思います。私は毎日仕事をしながら、板東の話に囲まれていましたが、その他にも鳴門の第九合唱団にやさしく受け入れられ、1年間半参加させていただきました。私にとってハイライトになったのは、毎年6月に鳴門で行われている第九コンサートに二回も参加させてもらったことです。唯一のドイツ人だった私にとって、暗譜でベートーベンの第九交響曲を歌う何百人もの日本人合唱団の一員としてコンサートに参加できたことがとてもいい経験になりました。このように人間はきっと兄弟になると私は思います。

しかし、仕事をするだけでなく、子供を通じた日常生活の中でも、日独交流を深めることができ嬉しかったです。例えば、保育所では、型にはまらない日独交流ができました。毎日保育士と保護者と話しながら、保育所のイベントだけでなく、ドイツ童話を読んだり、イースターエッグを飾ったりしながら何回も日独交流を深めるチャンスがありました。保育所のほかに遊び場や公園やスーパーなどいろんなところでも日独交流ができました。私と同じように日本学士であり、日本のファンである夫のカルステンは外国語の先生の仕事とボランティア活動によってドイツを紹介するチャンスと国際交流をするチャンスがたくさんあり、逆に、日本の文化も深く知るようになりました。私たちハンケルファミリーはこのように全員が国際交流員になりました。二年間日本で生活し、仕事をしたことは私たちにとっていい経験になり、この経験をいつまでも大事にしたいと思います。

日本に来る前、私たちは子供に日本の文化を知り、日本を愛するようになってほしいと考えていました。二年間、日本で生活しながら子供二人は阿波弁さえできるくらい日本語を上手に話せるようになり、たくさんのお友達を作りながら日本の文化に慣れていきました。二年間の日本での生活はいい思い出がいっぱいの二年間で、その思い出はいつまでも私たちの心の中に残っています。一番最初からやさしい心を持つ人達に歓迎され、徳島県鳴門市は私たちにとって二番目の故郷になりました。これからはドイツで生活をしていきますが、日本での生活や仕事のいい思い出を大事にしたいと思います。

私たちは二年間大勢の人にお世話になりましたが、特に川上先生に心から感謝を申し上げたいと思います。次の国際交流員ロバート・テルシグさんがたくさん面白い出来事と経験に恵まれることを願っています。

自己紹介 (Robert Telschig)

ゲーテン・ターク

私はロバート・テルシグと申します。2011年8月から、鳴門市ドイツ館で国際交流員として勤めています。

1986年2月、ザクセン州のケムニッツ市(当時はまだカール・マルクス・シュタットと呼ばれていました)の周辺にあるブルグステットに生まれ、わずか10ヵ月の赤ちゃんのときに父の仕事関係で同じザクセン州の真ん中にあるオシャーツという町に引っ越し、育てられました。静かな生活の中で高等学校を卒業するまでに、「日本」という不思議な国への興味がどんどん高くなっていきました。



ロバート・テルシグ

そのため、2004年10月に入学したライプツィヒ大学では、日本学を専攻として勉強し始め、アメリカ学とメディア学を副専攻としました。2007年10月にはじめて来日し、千葉大学で一年間留学しました。部活動としてハンドボール部に入ることで、皆と仲良くしながら、日本の様々

なことを勉強することができました。

専門としては日本のメディアや情報技術に興味があったので、日本の「ミクシィ」を修士論文のテーマとして、2011年2月に大学を卒業しました。

興味深いことに、鳴門市に赴任する前に、前任者の国際交流員アンヤ・ハンケルさんと同じように、2004年から2006年までドイツ館に勤めていたマティアス・ヒルシュフェルドさんと会ったことがあります。ヒルシュフェルドさんは、私と同じライプツィヒ大学で日本学を勉強した先輩で、2006年秋のある授業で自分のドイツ館での仕事や生活について発表したヒルシュフェルドさんを見ながら、私もこういうことをしたいという考えが頭の中に浮かびました。

赴任してからのドイツ館での仕事はすごく面白いです。ドイツ館の案内だけでなく、板東収容所の歴史について勉強することや今まで知らなかった日独交流の面も興味深いです。

地域の皆さんと接する機会も多く、私の鳴門市阿波踊りでの踊り方を見た方々には申し訳ございませんと伝えたいです。

最後に、私の赴任にあたって、様々な面で支援してくださっ

た前任者のアンヤ・ハンケルさんに、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

どうぞよろしくお願いいたします。

ドイツからの訪問客

大統領一行以外に、ノルトライン・ヴェストファーレン州独日文化交流育英会の研修生10名が今年も来ました。館内を案内したほか、慰霊碑に献花してもらいました。この外に、ドイツの映像作家ブリギッテ・クラウゼさんが板東に2週間近く滞在し、板東俘虜収容所に関する取材をあちこちで行っていました。彼女は1月に再来日し、仕上げの取材をするとのことなので、次回まとめて紹介することにしたいと思います。下に紹介する「アクロアマ・アニマータ」の音楽家たちも、演奏会翌日にドイツ館を国際交流員ロバート・テルシグの案内で観覧しました。

ドイツ館コンサート

3月以降に開催された音楽会から、鳴門市が主催者となって行われたものを紹介します。これらはすべて日独交流150周年記念事業の一環として行われました。

鳴門&ドイツ 民話で結ぶ音楽物語

3月20日

民話作者飯原一夫氏の講演を挟んで、ドイツ民話の「灰かぶり」、日本の創作民話「おりづる和尚」を映像と音楽とお話で展開するというなかなか意欲的で興味深い公演でした。出演者は高島由里(朗読)、川人雅音(バソン) 栗田美佐(ピアノ)、飯原一夫。

ファゴット、チェロ、ピアノによるクラシック・コンサート

7月16日

出演：フリードリヒ・エーデルマン、レベッカ・ラスト、福田可織。

ファゴットとチェロという、いささか馴染みの薄い取り合わせですが、ご夫婦らしく息の合った演奏で、楽しく聞かせていただきました。この演奏会はエーデルマンさんからの申し出で「東日本大震災復興チャリティーコンサート」として開催されました。入場料は無料でしたので、来場者に募金をお願いすると共にご夫妻のCDの売り上げの一部も義援金としていただきました。なお、この義援金は日本赤十字社に寄託致しました。



アクロアマ・アニマータ演奏風景

遅ればせながら、ここでご報告するとともに義援金をお寄せいただいた方々にお礼申し上げます。

室内合奏団「アクロアマ・アニマータ」演奏会

9月24日

これは2006年に結成されたドイツ在住のかなり若い音楽家からなる室内合奏団で、ノルトライン・ヴェストファーレン州を中心に活動しています。レパートリーはバロックから初期クラシックの有名な曲だけでなく、あまり知られていない曲を紹介することを使命としているようです。演奏者は弦楽器がほとんどですが、チェンバロ奏者にフルート奏者もいます。「アクロアマ・アニマータ」とは聞き慣れないことばですが、ラテン語で「生きた音楽との出会い」を意味するのだそうです。

曲目はバッハのブランデンブルク協奏曲など、いずれも親しみやすく楽しいものであったが、とりわけハイドンのチェロ協奏曲第1番は出色であった。

今回ドイツ館ホールの舞台にチェンバロが初めて登場しましたが、これを借用するために所有者の庄野達夫氏をはじめとして何人もの方にお世話になりました。この場を借り、改めてお礼申し上げます。おかげさまで本物のバロック音楽を堪能できました。

内藤敏子と北村哲朗「チターと歌のコンサート」

11月5日

この楽器を使ったコンサートの企画の発端は、昨年元捕虜製作によるチターがその孫からリュネブルク市の独日協会を経て寄贈されたことでした。この元捕虜の方はルドルフ・ユングといい、兵庫県加古川市の北、小野市と加西市にまたがってある青野原（あおのがはら）というところにあった収容所に収容されていた人で、その当時からチターを製作していたらしいのですが、今回いただいたものはドイツへ帰国後1957年に作ったものです。さらに捕虜時代に書いた楽譜も寄贈を受けました。

そこで、前館長の中野正司が旧知のチター演奏家、内藤敏子さんに連絡を取り、楽譜に書かれた曲の演奏と寄贈されたチターについての鑑定と評価をお願いしたわけです。内藤さんは日本におけるチター演奏の第一人者であり、日本チター協会の会長をなさっています。

こういった経緯で開催されたコンサートですが、内容をバラエティ豊かにしてはどうかという内藤さんからのご提案を受け、バリトンの北村哲朗氏とのジョイントコンサートが実現しました。曲目はウィーン音楽から、ドイツと日本の歌、そして捕虜



チターについて解説する
内藤敏子さん

製作の楽譜中の曲目、そのほかチターと楽曲にまつわるお話もあるなど多彩なもので、聴衆をたっぷり楽しませてくれました。また多くの方にこの楽器への関心をかき立てたことでしょう。上記の元捕虜製作になるチターも演奏されましたが、楽器の状態があまり良くなくてかなり苦労されていたのが残念でした。



歌う北村哲朗さんとチター伴奏の内藤さん

第18回ドイチェス・フェスト in なんと

ドイチェス・フェスト in なんとが10月30日、ドイツ館前広場とドイツ館1階ホールを会場に催されました。今回で18回を数える毎年恒例の行事なのですが、回を追うごとにますます盛会になるというわけではなく、もっとたくさんのお客様に来ていただき、楽しんでもらいたいところなので、実行委員会の一



ドイツ館前広場で踊る「古典舞踊団」

員として忸怩たる思いがあります。今年は生憎の雨模様で来場者が少なく、また一部をのぞき、ほとんどの公演が屋内であったため、テント出店者の方々には気の毒なことでした。

名称に「ドイチェス」という言葉があるように、イベントのひとつとしてドイツ人の演奏や演技が毎回行われています。今年はドイツ、ヴォルフスブルクの「古典舞踊団」による19世紀末から20世紀初頭にかけてのダンスがあり、午前、午後の2回公演予定のところ、屋外でもやりたいというご本人たち希望で、もう一回昼休み中にも行われて、観客を楽しませてくれました。ダンサーはとてもすてきな年配の紳士淑女方でしたが、踊りは年齢を感じさせないものであり、魅力的でした。ちなみにヴォルフスブルクは自動車の「フォルクスワーゲン」社の本社があるところであり、男性方はすべて同社で働いていたとのことでした。

板東俘虜収容所跡地で 「赤十字ゆかりの地」碑の除幕式

9月8日(木)に板東俘虜収容所跡地の一角、「菩提樹の森」で「赤十字ゆかりの地」碑の除幕式が近衛忠輝日本赤十字社社長、藤原紀香赤十字広報特使、飯泉嘉門日赤徳島県支部長(徳島県



式辞を述べる近衛忠輝日本赤十字社社長

知事)、泉理彦鳴門市長らを主賓に迎えて行われました。

赤十字の基本原則のひとつである「博愛」の精神が収容所の運営で生かされていたこと、ドイツ兵俘虜が困窮するウラジオストックのドイツ、オーストリア兵士救済のために開催したチャリティ・コンサートで明確に赤十字の精神を意識して、その演奏会プログラムに赤十字のマークを掲げていること、それがこの「赤十字ゆかりの地」モニュメント設置の理由だそうです。

この演奏会プログラムは、鳴門市ドイツ館所蔵のものが陶板に複製されてモニュメントにはめ込まれています。ちなみにこの陶板は、世界の名画を陶板に複製展示している大塚国際美術館のものと同じメーカーの製作で、褪色劣化しないのだそうです。

収蔵品紹介 絵はがき

これまで、このコーナーで板東俘虜収容所での印刷物をいろいろ紹介してきましたが、それらはほとんど謄写版(ガリ版)によるものでした。そしてこれらを製作したのが捕虜たちの「板東収容所印刷所」でした。実は、板東ではもうひとつ石版(リトグラフ)による印刷を行う所があって、「石版印刷所」とか「板東東印刷所」と称していました。ここで印刷されたものの数は前者ほど多くはありません。

今回紹介する絵はがきは双方の印刷所で制作されていました。ただ、絵はがきのどこにも印刷所の名称が印刷されていない場合があります。その場合は印刷面の特徴で判定するしかありません。「板東収容所印刷所」で謄写版により制作された多色刷り印刷物は、当時すでにドイツ本国でも知られていたのですが、石版による印刷と誤解されたほど素晴らしいものでした。しかし印刷面をルーペで覗くと双方の違いが良く分かります。謄写版は目の細かなやすりの上に蠟原紙を置き、その上から鉄筆で線を引くので、印刷したとき線はどうしてもやすりの凸凹に対応して点線になります。あるいは少なくとも濃淡のある線になります。謄写版用のやすりは目が非常に細かいので、肉眼では判断しづらいことが多いのですが、ルーペで拡大するとよく分かるのです。もうひとつ、謄写版では線の太さを滑らかに変化させて描くことはできません。使っている鉄筆の太さがそのまま反映されることとなります。しかし石版だと筆やカリグラフィ用のペンで線幅に微妙な変化をつけて書くことが可能です。少し分かりづらくかもしれませんが、次の絵はがきを見比べてください。

絵はがきは、もちろん外部向けのはがきとして印刷されたものもありますが、実はそれ以外にもありました。板東俘虜収容所



左は謄写版、右は石版

では「収容所郵便」という会社(?)が作られ、収容所内での捕虜同士の通信を請け負っていました。そして石版印刷はこの所内向けの絵はがきを、クリスマスや新年、イースター、聖霊降臨祭などのグリーティングカード用に何種類も発行・販売していました。しかし残念ながら、その全貌はつかめていません。ドイツ館が所蔵しないデザインのものが何種類も確認されています。以下に紹介するのは収蔵品の一部です。あて名書きの面をお見せしている葉書がありますが、その右上には切手風に絵が描かれ、そこに収容所郵便を示すドイツ語のLagerpost Bando、日本語の「板俘通」と書かれたスタンプが押されています。「板俘通」は「板東俘虜収容所通信」の略語です。



収容所内郵便の絵はがき (新年のあいさつ)

これまでの主な行事 (できごと)

先に紹介したコンサートとドイチェスフェストをのぞく主なできごとを紹介しておきます

5月3,4日 ワイン祭り

5月14日~22日 ドイツ鉄道パネル展

6月4日 うずしお七重奏団演奏会



収容所内郵便の絵はがき

6月19日 東日本大震災復興支援、会津若松市を応援するチャリティーコンサート

鳴門市は会津若松市と親善交流を結んでいます。その縁で、大震災の被災者が多く避難し、また大熊町役場も機能移転をした会津若松市をぜひ応援したいという板東を中心とする地元民の方々によるコンサート。

7月2日 セタコンサート

7月18日 チター演奏会

内藤敏子さんと高松のお弟子さんたちによるチターとその他の楽器による発表会

8月6日 低弦の競演

8月13,14日 ビール祭り

8月21日 第九フェスティバル

8月27日 子どものおながく館

9月2日 台風のため午後休館

9月3日 台風のため休館

9月17,18日 フードメッセ

11月20日 落語会

11月27日 こどもの音楽会

編集後記

本号はもともと9月末発行の予定だったのですが、もしかするとドイツの大統領が訪日を機にドイツ館に来られるかもしれないという話が持ち上がり、それならばそのことも記事にしたいと考えて発行を延期にしたのですが、いつの間にかこんなに遅くなり、はずかしい限りです。新旧の国際交流員にはせっついて9月中には原稿をもらっていたのに、申し訳ないことです。ちなみに二人の原稿は最初から日本語で書かれたもので、編集者の手は入っていません。